様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０６１９

研究課題名（和文）質的データとしてのライフストーリーのアーカイヴ化と＜調査遺産＞継承の経験的研究

研究課題名（英文）An empirical study on the archivation of life stories as qualitative data and succes sion in the ' research heritage'

研究代表者
小林　多寿子（KOBAYASHI, Tazuko）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：５０１９８７９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,700,000円、（間接経費）　1,110,000円

研究成果の概要（和文）：1970年代末のライフストーリー法リバイバル期より蓄積されてきた質的調査データは今、歴史的価値を持ち始め、調査資料の管理保存や二次利用をめぐってその扱い方が問われている。そこで質的調査研究におけるデータ実態と問題点を明らかにし、今後の活用可能性を検討するために、＜リサーチ・ヘリテージ(調査遺産）＞とアーカイヴ化という視点から質的調査データの経験的研究に取り組んだ。3年の研究期間中、質的調査者へのアンケート調査、アーカイヴの事例調査、社会学者の質的調査資料群調査という３種類の調査を実施し、その成果はフォーラムや学会シンポジウムでの報告、学会誌での論文発表や報告書の作成という形で研究成果を示した。

研究成果の概要（英文）：Since the late 1970s there have been contesting methodologies regarding the handling of lif stories. During this time, there has been an accumulation of qualitative data that have begun to attain historical values. In deciding how to manage such data, there is concern over the conservation and maintenance of the data both as sociological documents and with regard to any secondary uses. In order to understand this situation and the problems involved and explore what might constitute efficient use in the future, we conducted an empirical study on qualitative research data from the viewpoint of a 'research heritage' and archiving. Over a three-year period, we carried oun three different kinds of researches: as questionnaire for qualitative researchers, case studies on certain archives, and an analysis of qualitative research documentation. We have presented the results of this research at forum and symposium at academic conference, as papers in a bulletin and in a report.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：質的調査データ　アーカイヴ化　リサーチ・ヘリテージ　ライフストーリー　インタビュー　社会調査法　二次利用　デジタル・データ化

１．研究開始当初の背景

1970 年代終わりから顕著になったライフヒストリー/ライフストーリー法リバイバル以来 30 年以上にわたり質的研究は多様なテーマで実践され、人びとの生活世界やローカルな文化や社会を理解するための社会学的研究法として定着してきた。その一方で、質的調査者は長年の調査実践の産物として録音テープや自分史のような質的資料を数多く手元に抱えており、これらのデータ資料の管理保存の問題に直面している。隣接領域におけるアーカイヴ化の広がりという動向を受け、ライフストーリー・インタビュー等の質的調査データのアーカイヴ化によって質的調査における検証可能性を担保する方途や歴史的価値をもった＜調査遺産＞として質的資料やデータを継承する可能性を探求する着想に至った。

２．研究の目的

本研究は、ライフストーリー法をはじめとする質的調査で蓄積されてきた数多くの質的データを＜リサーチ・ヘリテージ（調査遺産）＞とアーカイヴ化という新たな観点から捉え直し、より信頼性の高い質的社会学研究法の基盤を固めることをめざす経験的研究である。質的研究者への現状調査や他領域でのアーカイヴ実態調査を通して、質的データのアーカイヴ化の方途を検討し、検証可能性を担保し、二次利用へ拓くためのアーカイヴ・ルールの確立と歴史的価値を持ち始めた＜リサーチ・ヘリテージ（調査遺産）＞の継承可能性を探求し、質的調査法の汎用性を高めることをめざして研究課題に取り組んだ。

３．研究の方法

本研究は、質的調査データのアーカイヴ化問題を、(1)社会調査としてのアーカイヴ化、(2)＜リサーチ・ヘリテージ（調査遺産）＞としてのアーカイヴ化、(3)個人的語りの歴史的価値に鑑みたアーカイヴ化という３つの局面に整理して研究に着手した。

(1)社会調査としてのアーカイヴ化とは、インタビュー等の質的データや資料を保存管理することによって社会調査としての検証可能性を担保し、一層の信頼性と妥当性を得た社会学的研究成果として質的研究が評価されること、そして学術目的での二次利用の可能性を拓くことをめざすものである。欧米の大学では社会調査のデータ・アーカイヴが設立され、研究や教育に利用されていることが知られているが、日本ではどのような現状にあるのだろうか。社会科学系の調査全般を視野に入れて国内の現状を調べ、諸外国の状況と比較してアーカイヴ化の実際を調べた。

(2)＜リサーチ・ヘリテージ（調査遺産）＞としてのアーカイヴ化とは、インタビュー調査のデータや資料を＜リサーチ・ヘリテージ＞すなわち＜調査遺産＞として保存していく可能性の検討を指している。たとえば質的研究を切り拓いた中野卓や森岡清美は、昭和20年代から全国各地で調査をおこなったが、その数多くの調査成果は日本の社会調査史において貴重なものであり、とくに調査データの散逸は防ぎたいと願っている。アーカイヴァル・ヘリテージ(記録遺産）の思想のもとに人間の「生の記録情報」を遺産として保存する必要性を説いてアーカイヴズ学を講じる安藤正人の思想に則ると、一人の社会学者の長年の調査活動や一つの調査プロジェクトから得られた多くの調査資料、日記などの個人文書やインタビューによるオーラル・データやフィールドノートなどは、社会調査史のうえで歴史的意義をもつ＜リサーチ・ヘリテージ（調査遺産）＞として散逸させることなく保存する必要がある。

(3)個人的語りの歴史的価値に鑑みたアーカイヴ化とは、とくにライフストーリー・インタビューが録音されたオーラル・データ自体が歴史的価値をもつようになった現状にもとづいたアーカイヴ化の発想である。たとえば歴史的出来事の体験者や社会問題の当事者を対象として実施されたインタビューが、20年30年と経過するなかで、語りそのものが歴史的証言となったり、失われつつある文化を伝える歴史的価値をもつようになっている。この点を重視すると、調査データは簡単に消去したり廃棄したりすることはできず、管理保存のためのアーカイヴ化の可能性はいかにあるのかを検討する必要がある。だが、歴史的価値ゆえに記録保存されたアーカイヴ資料に対して適切な管理と公開が要請されるとしたら、プライバシー尊重や個人情報保護を考えるとともに、かけがえのない歴史的価値が明らかになった個人の語りをいかに扱うことができるのか、その方途が検討されなければならない。

以上のような３つのアーカイヴ化の問題に焦点を絞ったうえで、研究期間中には国内外で現状調査や実態の把握に取り組むことをめざした。

そこで、本研究は、質的データ・アーカイヴ化の問題に対して、質的調査研究者への現状調査、国内のアーカイヴの実態調査、欧米の大学のアーカイヴ事例調査、という３つの調査を実施して実態把握とアーカイヴ化の可能性を考えることを計画した。具体的には、研究期間中に、①質的調査に携わる研究者へ現状を問うアンケート調査、②社会学における社会調査データ・アーカイヴや社会学者アーカイヴの実態調査、③隣接領域や国外におけるアーカイヴの事例調査、という３種類の調査によって実態の把握と可能性を検討することにした。

① 質的調査研究者への現状調査では、研究代表者・分担者が共に関わってきた生活史研究会やライフストーリー研究会、日本オーラル・ヒストリー学会に属する質的調査経験者にアンケート調査を実施し、質的調査者自身の質的データの扱いの現状をあきらかにする。また日本の社会調査史上、意義ある質的調査研究の成果を産出してきた社会学者森岡清美らに個別に質的データの管理保存の現況を主題とするインタビュー調査をおこなう。
② アーカイヴ実態調査では、先駆的なアーカイヴ、とくに飯島伸子文庫や京都大学学術研究資源アーカイヴ、公文書館などでアーカイヴズ現状をヒアリングする。
③ 隣接領域や国外における事例調査では、たとえばアメリカ合衆国のハーバード大学マーレイ・リサーチアーカイヴ、コロンビア大学オーラルヒストリーセンター、イギリスのサセックス大学ライフヒストリー&ライフライティング・リサーチセンター等、欧米のいくつかの大学における事例調査をおこない、先行例からアーカイヴの実際と技術的な工夫を学ぶ。
以上のような質的調査やアーカイヴの実態調査を中心にアーカイヴの実際を学び、社会科学的調査の倫理や学術調査指針に沿ったアーカイヴ・ルールについて検討するための情報収集調査を実施した。

本研究の特徴は、すでに収集された調査データの扱われ方の実態を調査することによって、調査者の収集したデータの現状と問題点を把握し、社会学的方法とデータの関係性を検討し、管理・保存・公開のあるべき方途を研究するところにある。また、質的データは、デジタル技術発展の影響を直に受けているが、かつて録音されたオープンリールやカセットテープレコーダーのなかのオーラル・データは劣化が懸念される一方で、近年の個人情報への配慮の高まりで個人的経験の語りをデータとしていかに扱い保存していくべきなのか、倫理や著作権とも関わる問題も検討課題となっている。加えて、個人的記録と歴史的価値の問題、調査データの検証可能性と二次利用を含む第三者のアクセスの問題、社会調査データそのものの遺産的価値としての管理保存の問題など、質的調査が直面する重要な現代的問題を踏まえ現状を検討し、質的調査が社会学的研究法として発展することに寄与する意義があると考えて取り組んだ。

４．研究成果
本研究課題に取り組むために研究代表者と３名の研究分担者で質的データ・アーカイヴ化研究会を組織し、３年間の研究期間中、１、２年目はおもに現状把握のアンケート調査とインタビュー調査、およびアーカイヴ機関での実態調査と事例調査をおこない、３年目には＜リサーチ・ヘリテージ＞をめぐるシンポジウムを組織して報告をおこなった。さらに３年間で計１０回の研究会を開催して共同研究を推進し、研究成果は学会発表や報告書作成によって公表した。

A)「質的調査データの管理・保存に関するアンケート調査」(2012 年 2 月実施）[後述]

B）フォーラム・シンポジウムの開催
2012 年 12 月 1 日フォーラム「質的調査データの公共性とアーカイヴ化―質的データ・アーカイヴ化の現状と課題」開催
第 1 部　質的調査データの公共性―「質的調査データの管理・保存に関するアンケート」結果をもとに
1. 結果の概略説明　井出裕久
2. 質的調査データの管理・保存・公開をめぐって―複数領域からの意見交換　小倉康嗣
第 2 部　質的データとアーカイヴ化の可能性―アーカイヴズの現場から
パネリスト:平野健一郎氏（国立公文書館アジア歴史資料センター)、嶋田典人氏（香川県立文書館）
2013 年 5 月 19 日　関西社会学会第 64 回大会シンポジウム「質的調査のアーカイブ化の問題と可能性」(於・大谷大学）桜井厚企画・司会、小林多寿子第 1 報告者
2013 年 10 月 19 日　日本社会学会第 86 回大会シンポジウム「リサーチ・ヘリテージ―20 世紀の調査遺産をいかに継承するのか」（於・慶應義塾大学）小林多寿子企画・司会

C）リサーチ・ヘリテージ調査―アーカイヴズ実態調査と森岡清美氏資料調査
【アーカイヴ実態調査】
2011 年 8 月　ハーバード大学マーレイ・リサーチアーカイヴ、コロンビア大学オーラルヒストリーリサーチセンター
2012 年 3 月　イギリス・サセックス大学
2012 年 8 月　フランス国立図書館
2013 年 3 月　飯島伸子文庫インタビュー
（法政大学舩橋晴俊氏）
【森岡清美氏資料群調査】
2012 年 1 月 31 日　森岡清美氏インタビュー
2012 年 7 月　森岡清美氏物置調査
2013 年 4 月・2014 年 2 月　森岡清美氏による資料群解説インタビュー

A)「質的調査データの管理・保存に関するアンケート」として、日本オーラル・ヒストリー学会、生活史研究会、ライフストーリー研究会という質的調査に関わる３つの学会・研究会に対して、質的調査の現状、質的調査データによる研究成果とその後のデータの扱い方を問い、質的調査データの現状と問題点を把握するために郵送によるアンケート調査を実施した。2012年2月に350通を送付し、同年3月末までに131通の回答を得た。質的調査者自身にその調査活動と学術成果の実態を問うこ

とは国内の社会学では初めての試みである。
　アンケート回答者の専門は、社会学 68、歴史学 19、教育学 13、文化人類学 12、民俗学 5 のほか、心理学、物理学、看護学、社会福祉学、アーカイブズ学、記録管理学、人文地理学、社会デザイン学、経営史、労働関係論、社会言語学、日本語教育、通訳学、翻訳学など、多岐にわたる分野に広がっている(複数回答)。とくに回答者の半分以上をしめる社会学 68 人の回答に絞って、質的調査データをめぐる実態から浮上した社会学領域における質的データの問題をまとめておく。
①質的調査と許諾
　本調査を実施して、質的調査における倫理的意識における変化があきらかになった。2000年代以降の調査においては「許諾書作成」の増加と、二段階の許諾プロセスという、よりていねいに段階を踏む許諾への変化が顕著となっている。二段階の許諾とは、インタビュー実施の調査許諾に加えて、作品化の際に利用許諾も得るという調査許諾と利用許諾というプロセスである。
②調査データの管理・保存への考え
　社会学専門の回答を概観すると、 調査データの社会的価値と公開、質的データの特性と調査のコンテクスト、質的調査データ保存への社会的コンセンサスの必要性という３つの点で質的調査データをめぐる特徴的な指摘があった。
　第一に、調査データの社会的価値と公開とは、データの価値が社会的公開によって社会関係のなかで意味づけられるように努めることがこれからの質的研究では重要であるという指摘である。調査データの公開は研究分野全体の発展につながる創造的営みとして価値づけられ、調査者自身が調査データの社会的価値を認識し、公開することで研究分野全体の発展につながる創造的営みとすべきである。質的調査者にとっては、調査で得たデータを個人の研究に使うにとどまらず、社会的公開によって社会関係のなかに意味づけるという仕事も重要である。この点は質的調査研究の分野で一層の議論が必要である。もう一つ、「公共性の高いデータ」という観点で、調査データの種類によってデータの公開性を考えるべきという主張も注目される。調査データの内容や調査の資金源に従って高い公共性をもつデータとそうではないデータがある。たとえば調査が公的資金によるものや広く関心を集めそうな調査内容である場合、それらの調査データは公共性が高いと考えられるべきであり、そのようなデータは他者による分析へ開かれるべきであるという調査データの公共性という考え方も今後一層、議論を深めていく必要がある。
　第二に、 質的データの特性と調査のコンテクストをめぐって、調査データの種類という点でインタビュー・データの特性を踏まえるとインタビュー・コンテクストから切り離されたデータの価値はいかに確保できるのか、個別の文脈や関係と切り離されたときのインタビューの価値はどうなるのか、この点についての議論が求められ、またこの特性をふまえて扱われる必要がある。「知が生成された」調査のコンテクストを記録することで豊かな了解可能性につながるなら、オーラリティを活かした管理・保存のしかたを積極的に考えていくことで質的データとしての公共化を進めていくことが可能になる。
　第三に、質的調査データ保存への社会的コンセンサス形成の必要性がある。とくに歴史的出来事の体験を聴き取った語りについて調査データとしての社会性を考えることの難しさが指摘されている。歴史的価値のある出来事の体験継承のための公開と語り手個人のプライバシーへの配慮を両立させることの困難さである。対応策として長期間の非公開と資料保存を支える安定したアーカイヴの設立が考えられるが、そのようなアーカイヴの資金や人材の確保と質的調査データの収集保存への社会的コンセンサスの形成が必要である。
　質的調査データの公共性の認識のもとに、データの学術的意義や社会的意味、歴史的価値を示し、保存と公開のルールを確立できれば、質的調査データのアーカイヴ化は可能であるのか。まずアーカイヴ・ルールの確立とアーカイヴ・システムの設立が求められるであろう。アーカイヴ・ルールの確立のためには、調査対象者の許諾のほかに、調査データへのマスキングなどの処理、非公開期間の設定、公開対象の限定、公開手続きの明確化、
　これらの手続きの方針を確かにすることが求められる。一方、アーカイヴ・システムの確立は容易ではなく、非公開期間を30年あるいは50年とするときに永続性の確保されたアーカイヴ機関を設立することはいまの日本で簡単ではない。データの記録媒体の急速な変化というデジタルテクノロジーの発展に合わせていく必要性もある。物理的な施設を確保することの困難な場合、ネットデジタル時代であることを活かして横断型ネットワークで結ぶ非施設型のアーカイヴを構築するという示唆は一つの可能性を示している。

　3年間の研究成果は、『質的データ・アーカイヴ化とリサーチ・ヘリテージ―2011-2013年度科学研究費 研究成果報告書』として、2014年3月31日に印刷作成した冊子体の報告書にすべてまとめて表している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 ９ 件）

① 桜井厚「地域コミュニティの生存戦略―東日本大震災における被災地の対応から」『応用社会学研究』56 巻　2014 年 1-16 頁（査読無）
② 小林多寿子「＜人生＞を書く、＜人生＞

を語る―ライフストーリー実践の町から―」『TASC MONTHLY』No.455 2013 年 13-18 頁（査読無）

③ 小林多寿子「生活学へリテージ・プロジェクト 2012 1．生活学へリテージ・プロジェクトのねらい」『生活学論叢』vol.23 2013 年 36-37 頁（査読無）

④ 小倉康嗣「エイジングの再発見と「生きる意味」―第二の近代のなかで」『三田社会学』第 18 号 2013 年 3-23 頁（査読無）

⑤ 小林多寿子「オーラルヒストリーとピルグリメージ―日系アメリカ人の聖地と＜巡礼＞―」『日本オーラル・ヒストリー研究』第 8 号 2012 年 31-46 頁（査読無）

⑥ 小林多寿子「『福翁自伝』におけるオーラリティと多声性」『慶應義塾福澤研究センター通信』16 号 2012 年 3 頁（査読無）

⑦ 桜井厚「戦争体験を語り継ぐストーリーの分析」『応用社会学研究』55 号 2012 年 79-98 頁（査読無）

⑧ 桜井厚「問題経験の語りがたさ、あるいりは沈黙」『社会学論叢』（日本大学社会学会）172 号 2011 年 1-22 頁（査読無）

⑨ 小倉康嗣「ライフストーリー研究はどんな知をもたらし、人間と社会にどんな働きかけをするのか―ライフストーリーの知の生成性と調査表現」『日本オーラル・ヒストリー研究』第 7 号 2011 年 137 - 155 頁（査読有）

〔学会発表〕（計 １０ 件）

① 小林多寿子「リサーチ・ヘリテージ―20 世紀の調査遺産をいかに継承するか」日本社会学会 2013 年 10 月 13 日 慶應義塾大学 東京都

② 小倉康嗣「生きられる経験/当事者/当事者研究」三田社会学会 2013 年 7 月 6 日 慶應義塾大学 東京都

③ 小林多寿子「質的調査データの公共性とアーカイヴ化の問題」関西社会学会 2013 年 5 月 19 日 大谷大学 京都府

④ 小林多寿子「キャリアデザインと質的調査法―ライフストーリー研究からの可能性―」法政大学キャリアデザイン学会 2012 年 10 月 17 日 法政大学(招待講演) 東京都

⑤ 桜井厚「戦争体験を語りつぐライフストーリーの分析」日本オーラル・ヒストリー学会 2012 年 9 月 9 日 椙山女学園大学 愛知県

⑥ 小倉康嗣「エイジングの再発見と「生きる意味」―第二の近代のなかで―」三田社会学会 2012 年 7 月 7 日 慶應義塾大学 東京都

⑦ 桜井厚「出来事と語り、そして語り継ぐ」長崎大学第二期中期目標・中期計画における重点研究課題「持続可能な東アジア交流圏の構想に向けた人文・社会科学のクロスオーバー：〈共生〉概念の学際的統合にもとづいて」（基調講演）2012 年 3 月 1 日 長崎大学 長崎県（招待講演）

⑧ 小林多寿子「『福翁自伝』におけるオーラリティと多声性―ライフストーリーのなかの＜声＞を読む―」慶應義塾大学福澤研究センター主催シンポジウム「多角的に読む『福翁自伝』」2011年11月17日 慶應字義塾大学 東京都

⑨ 小倉康嗣「〈ライフストーリーの知〉と調査表現―ライフストーリー研究はどんな知をもたらし、人間と社会にどんな働きかけをするのか」日本社会学会第84回大会テーマセッション「ライフストーリー研究の可能性」2011年9月17日 関西大学 大阪府

⑩ 小林多寿子「オーラルヒストリーとピルグリメージ」日本オーラル・ヒストリー学会第 8 回大会 2011 年 9 月 11 日 松山大学 愛媛県

〔図書〕（計 １０ 件）

① 桜井厚・小林多寿子『語りが拓く地平』せりか書房 2013年 300(15-35､144-166)頁

② 小倉康嗣『越境する家族』学文社 2014 年 276(190-211)頁

③ 小倉康嗣『感情を生きる―パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾出版会 2014 年 136(14-36)頁

④ 小倉康嗣「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティ―なんのために、どのように表現するのか」浜日出夫・有末賢・北村英樹編著『被爆者調査を読む―ヒロシマ・ナガサキの継承』慶應義塾大学出版会 2013年 299(207-254) 頁

⑤ 小林多寿子「フォーラム記録 『質的調査データの公共性とアーカイヴ化』質的データ・アーカイヴ化研究会」町村敬志編『平成 24 年度一橋大学教育プロジェクト「社会科学における『資料の収集・保存・活用』教育の実践」活動成果報告書』2013 年 84(21-23)頁

⑥ 小林多寿子「沖縄県公文書館―宮城聰文書からみるアーカイヴ資料利用の可能性」町村敬志編『平成 23 年度一橋大学教育プロジェクト「社会科学における『資料の収集・保存・活用』教育の実践」活動成果報告書』2012 年 43(21-22)頁

⑦ 小倉康嗣「第 2 章 現代社会と生成的エイジング――再帰性の深みへ」堀薫夫編『教育老年学と高齢者学習』学文社 2012 年 253(54-79) 頁

⑧ 桜井厚『ライフストーリー論』2012 年 弘文堂 171 頁

⑨ 小倉康嗣「ライフストーリー―個人の生の全体性に接近する」「生/ライフ―『生き方』を主題化し表現する」藤田結子・

北村文編『現代エスノグラフィー』　新曜社 2012年 257(96-103、172-181)頁
⑩ 小林多寿子「オーラルヒストリーとアーカイブ化の問題―社会学からの議論」岩本通弥・法橋量・及川祥平編『オーラルヒストリーと＜語り＞のアーカイブ化に向けて―文化人類学・社会学・歴史学との対話―』成城大学民俗学研究所グローカル研究センター 2011年 172(56-68)頁

６．研究組織

(1)研究代表者

小林　多寿子（KOBAYASHI, Tazuko）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：５０１９８７９３

(2)研究分担者

桜井　厚　（SAKURAI, Atsushi）
立教大学・社会学部・特定課題研究員
研究者番号：８０１５３９４８

井出　裕久（IDE, Hirohisa）
大正大学・人間学部・教授
研究者番号：５０２２３１２８
（平成 23 年度連携研究者、平成 24 年度から研究分担者）

小倉　康嗣（OGURA, Yasutsugu）
立教大学・社会学部・准教授
研究者番号：４０６２６１９９
（平成 23 年度研究協力者、平成 24 年度から研究分担者）